

ハイデルベルク信仰問答より

問 62 しかし、なぜ、私たちのよい業が、神の御前で私たちの義となり、少なくとも、その一片にもなりえないのでしょうか。

答え 神の裁きの前に立ちうる義は、全く完全であり、徹頭徹尾、神の律法と一致するものでなければならぬという理由によります(ガラテヤ 3:10)。しかし、この世の生で、私たちの最上の業でさえ、すべて不完全であり、罪に汚されている(イザヤ 64:6)のであります。

ここでの問いは、人間が行なう「善」が神の評価の対象にならないことについての疑問です。たしかに、人間世界には「愛」と呼ばれる行いがあり、それなくしては成り立たない社会が存在します。親と子、夫婦、きょうだい、教師と生徒、上司と部下など、いずれの領域にも「愛」は不可欠です。しかしながら、私たちはどの身分に身を置くときにも、自分が隣人に注ぐ愛が不十分であり理想とかけ離れていることを知っているはずで、如何に頭知識を増し加えても失敗を繰り返す自分がいるのです。

問 62 では、「私たちのよい業が、神の御前で私たちの義となり、少なくとも、その一片にもなりえない」と、念入りな言い方がされています。

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という作品には、殺人や放火を繰り返した一人の大泥棒が登場します。彼は数々の悪事ゆえに地獄に突き落とされたのですが、地上で行なったただ一つの善事、小さな蜘蛛を踏み潰さなかったという業があったため、御釈迦様はそれに目を留めて極楽から救いの蜘蛛の糸を下ろしてくれました。血の池からその糸を伝って必死で登り始めた彼は、後から無数の罪人が着いて登ってくるのに気づき、彼らを罪人と呼び、付いて来るなどわめきました。その途端、希望の蜘蛛の糸はプツリと切れ、彼は真逆さまに血の池に落ちてしまったというストーリーです。この話から、読者はどこまでも自己中心的な、死んでも救いようのない人間の姿を見て取るのでしょうか。

聖書によれば、「蜘蛛の糸」で言われるような「ただ一つの善事」でさえも、神の御前では無価値だということになります。それすらも私たちの救いのためには何の役にも立たない。「神の裁きの前に立ちうる義は、全く完全であり、徹頭徹尾、神の律法と一致するものでなければならぬ」。そのような義を私たちは持ち合わせておらず、仮に人の目に「善」と映るものでさえ、そこにはどこか歪んだ動機が入り込んでいる。「徹頭徹尾、神の律法と一致する」義、それを持っているのは主イエスただお一人であり、私たちはこの方の義を戴くことによって神の御心に適う者となるのです。あたかも私たちがその義の業を行なったかのように、神は主イエスを通して私たちを見てくださる。

但し、私たちの「行い」は、同じ行為であっても、救われる前と後では意味が違っているということを加えておきましょう。救いに至るための義の業は存在しませんが、救われた結果としての義の業は存在します。

私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。(エペソ 2:10)

キリスト者となる目的は、私たちが神に喜ばれる業を行なうためだと、パウロは明確に語っています。これは、救われた結果として私たちの内側から溢れ出てくる生き方であり、そこにキリストの義が映し出されているならば、彼にあって神に喜んでいただけられるでしょう。しかし、それでも私たちの「義の業」は救いにおいては何の役にも立ってはいない。私たちがへりくだればへりくだるほど、主イエスの義が輝き始めるのです。